

救いようのない馬鹿

小倉 一純

高校二年生の三学期、席が隣りになったのを契機きっかけに彼女ができた。

半世紀も前の話である。彼女の父親は歯科の開業医だった。戦後すぐの旧東京医科歯科大学を卒業していた。そんなことへの忖度そんたくもあり、成績のよくなかった僕は一浪して獣医学科に進学した。犬を飼っていて動物は好きだったが、獣医師になるのだ、という強い気持ちがあつたわけではなかった。

受験直前になってその彼女に振られた。つき合っていた頃には、彼女はよく、

「わたしい、絶対にッ、サラリーマンの奥さんにはなれないと思うの」

といていた。あれは一体、どういう意味だったのだろうか。その後、彼女は国家公務員と結婚した。失恋は四十歳を過ぎても僕の人生に影を落とし続けた。あの頃、僕は彼女と結婚することを夢見ていた。

彼女が僕を振ったのは、僕の浮気が原因であつたという。

一浪の予備校時代、毎日のように、親友の彼女と同じ電車で帰宅していたことがある。彼女も僕も同じ代ゼミに通っていた。僕は西武池袋線沿線だったが、彼女に合わせて、毎晩、西武新宿線に乗り込んだ。

そのせいで、西武新宿線さぎのみや鷺宮駅から西武池袋線中村橋駅まで、北へ向かってバス通りを二キロ近くは歩くことになった。真冬の寒さが身に染みた。都心と郊外とを東西に結ぶ二本の西武線の軌道はほぼ平行に走っている。

僕はその彼女とデートはおろか、手をつないだことさえなかった。

「わたし知ってるんだから……」

歯科医の娘はいった。誰かから告げ口でもされたのだろう。その彼女は、僕の受験を理由に、一か月に一度位しか、デートしようとしなかった。素敵な女子が傍らにいれば電車がぐらい一緒に乗りたいと思うのが人情だろう。それもダメというなら、僕は出家しゅっけでもすればよかったのだろうか。

夏の終わりに、獣医学科を辞めた。失恋した以上、そこに留まる必要がなかったからだ。それだけが理由ではなかった。生物の解剖実習や動物と向き合う中で、獣医という職業の厳しさが思われた。

六年間の勉強を終えても、国家試験に合格できなかったら、獣医師とはなれない。確かな信念もない僕には、そんな厳しい現実についていけるだけの気持ちもなかった。

その後、僕の人生では、この失恋がずっと尾を引いたが、それは彼女をつかまえておけなかった自分自身にも責任がある。そもそも僕は、子供の頃から、自分の気持ちを相手に伝えるのが苦手だった。

ある日、西武新宿線の彼女から突然、呼び出しの電話がかかった。鷺宮駅で落ち合って、通っていた予備校の自習室へ一緒に出かけようというのだ。獣医学科を辞めた僕は二浪目も同じ代ゼミに通っていた。一方、彼女は一浪で早稲田大学文学部に入学していたが、

時々、代ゼミにも顔を出してくれていた。

十分ほど駅の改札で待っていると、彼女があらわれた。時刻はすでに午後四時を回っていた。

ロングヘアの彼女はピュア・ホワイトのスカジャンに細身のブルージーンズ、陸上部で鳴らした彼女は足が長かった。そこへ当時の流行のレッグウォーマーと、耳にはアラレちゃんを思わせるイヤーマフをしていた。どちらにも淡いピンクが使われている。

僕の視線はその姿に釘付けになった。そして、思った。

「一体、彼女はなぜこんなオシヤレをしているのだろうか？」

その後は彼女と一緒に代ゼミの自習室で勉強をし、いつも通り彼女と同じ西武新宿線に乗り、帰路についた。

その後、僕は、父親の希望通り、文系だが、北海道大学に進学した。

後年、四十代だった頃、近く高校の同窓会

が開かれるという折り、その彼女から、一通のメールが届いた。

「あのときの小倉くん、本当に自習室で勉強するんだもの」

そのすぐ後で彼女に電話をした。

「毎晩、同じ電車に乗り込んで来る小倉君ってねえ、わたしからみたら、好きだ、好きだって、いわれているようなものだったのよ」
「えっ」

あの時の彼女のオシヤレは僕のためだったのである。当時、彼女には彼氏がいて、それは僕の親友だった。二人とも高校の同級生で、代ゼミの自習室の勉強仲間でもあった。

その彼女だが、数年前のコロナ禍、僕と旧交を温めるチャンスも与えず、天に召されてしまった。

最近、思ったことがある。僕を振った彼女のいったことは実は間違っていなかったのではないだろうか。

僕は救いようのない馬鹿だった。